『ほどほどの大切さ』

—中国思想の特質・中庸に就いて—

平成１５年１１月１２日
公開文化講座講演概要
一般科目　　小倉正昭

１　中庸思想研究の問題点

中庸とは、「偏りのない状態であり、過ぎた状態も及ばない状態もない、程よい真ん中、凡庸が良い」（朱子）という思想である。このモラルは、善悪や清濁や是非や左右を区別する事が好きな、単純明解を好む日本人には、煮え切らない、中途半端で曖昧な思考の様に思える。中庸思想には、現在まで武内義雄、宮崎市定、島田虔次、金谷治等の諸先生の大変優れた研究や言及がある。しかし構造的な研究となると、金谷先生の指摘が唯一の状態であり、まだ以下の様な重要な諸問題が未解決な状態である。

①中庸は、どの様な思想構造なのか。金谷先生の言う三角形の頂点説でよいのか。
②孔子・孟子はどの様に中庸を実践したのか。中庸と『論語』や『孟子』との関係。
③何故に中庸というモラルが中国では必要とされたのか。
④孔子や孟子が絶賛する中庸の目的は何なのか。中庸の生まれた背景は何なのか。

今回の講演では、以前に同講座で話した「二元論の世界一近くて遠い国中国と付合うために」を踏まえて、中庸の問題点を孔子や孟子の主張より少しでも明らかにしたい。

２　対立する中庸思想の前提

賢愚や善悪や表裏や是非など、対立的で対照的な両極端を一対一ペアとして思考の基本とするのが、中国思想の基本的な特色である。この二元論な思考は、対の思想・対待の思想といわれる。ところで中庸思想の前提には、「過ぎた状態と及ばない状態」という、対照的な両極端が存在する。従って中庸思想は、中国思想の基本的特色である対の思想から派生してくる中国人特有の思想である。

対の思想から派生する中庸思想を考える上で大切なのは、中庸の前提である両極端にも対の思想が存在するという事である。例えば善人でもなければ悪人でもない普通人というのが、一般的な中庸の理解であろう。しかし逆に善人でもあれば悪人でもある普通人も、中庸の人なのである。従って中庸思想には、善人でもなければ悪人でもない普通人と、善人でもあるが悪人でもある普通人という、両極端を否定する中庸と両極端を肯定する中庸がある。中庸思想の前提である両極端には、否定と肯定という両面思考が存在する。

『中庸』には、「中は喜怒哀楽の感情がない状態」（１４４）と言うが、「舜は善悪の両端を執りて中を民に用う」（１５０）とも言う。孟子は、「伯夷は潔癖で、柳下恵は汚濁だ、君子は従わない」（上１４８）と言う。その一方で、「伯夷と柳下恵は百代の師表だ」（下４）と言う。凡そ逆方向の極端理解を持つ中庸思想が存在している。

３　中庸の思想構造

両極端を否定する中庸と肯定する中庸は、どの様な思想構造をしているのであろうか。「両極端の中央」という単純な概説的理解から、更に構造論的な理解に深める必要がある。何故なら善人でもな

ければ悪人でもない普通人も、善人であるが悪人でもある普通人も、色々あり、多様な普通人の存在を考えることが可能だからである。

『中庸』には、「喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂う。発して皆な節に中る、これを和と謂う」（１４４）と説明する。和は喜怒哀楽の感情が融合した調和状態である。汁けの多いごった煮である羹（あつもの）と同様。甘くもなく酸っぱくもないが、甘酸っぱい味がすることである。従って両極端否定の中庸の思想構造は、中＝和であり、両極端の濃度が節度よく五分五分融合している中和状態のことである。だから善人でもなければ悪人でもない普通人は、善人の味もあるが悪人の味もある、それらが五分五分に融合調和した中和状態の普通人のことである。

孟子は、子莫を「両極端を握って中間を執っているのは可。しかし真ん中を執るのに秤で重さを計る事（権）がなければ、一極端に固執しているのと同じである」と、子莫を「執中＝無権＝執一」（下３５３）と批判する。権はもともと秤の分銅の意味である。つまり秤で一つ一つ極端の重さを計量して、伯夷と柳下恵の重さが釣合っている均衡状態が中庸なのである。従って両極端肯定の中庸の思想構造は、中＝権であり、両極端の比重が程よく五分五分に釣合う均衡状態のことである。だから善人であるが悪人でもある普通人は、善人と悪人が対極にいて、その重さが五分五分に釣合う均衡状態の普通人のことである。

４　中庸思想の実現方法

両極端を否定して両者が融合する中和の中庸実現には、先ず既存の極端思想を消去する必要がある。しかし両極端の同時両立が絶対必要不可欠なのである。孟子は「墨子の博愛主義は父を無視するから、楊朱の個人主義は君を無視するから不可。両者は禽獣である」（下２５９）と言っている。従って中和状態の中庸は、両極端を消去した上で、新しく両極端が同時両立するように人為で意識的に製作する新思想である。これは孔子が「学問すれば頑固でなくなる」（２１）と言い、孟子が「中庸の人が不中を教育する」（下６９）と言うように、教育で両極端をなくし両者を融合して中和を実現するのである。つまり善人には悪人の良さを、悪人には善人の良さを教育して、善と悪が程よく交じり合う普通人を製作することである。この中和を制度化したのが、人倫不易の大道である礼である。従って中和の中庸の学習実践は、具体的には礼を基準テキストにして実現する。

子莫を批判する孟子は、「一極端に固執するのを憎むのは、全極端の長所を生かしていないからだ」（下３５３）と言う。だから全極端の長所を満足させるのが儒教の中庸である。しかし対立する両極端の同時両立は絶対不可である。孟子は「一人で楽しむのと大勢で楽しむのといずれが楽しいか」（上７０）と、二者択一を迫る。であれば運動論的に両極端を飛び移る以外、両極端を満足する方法はない。『論語』には「君子は三変する」（２６３）とも言う。従って両極端を肯定して両者が均衡する中権の中庸実現には、一定の規則性がなく、軽重を考えて臨機応変に両極端を飛び移る豹変により、両極の比重を均衡することで中庸を実現するのである。つまりある時は善人から悪人になり、またある時は悪人から善人に豹変して、悪人と善人の重さを臨機応変に均衡させるのである。

５　中庸の必要な理由

孟子は、「墨子の博愛主義は父を無視して家族秩序を混乱させる、楊朱の個人主義は君を無視して社会秩序を破壊する」（上２５９）と批判する。つまり極端思想は、人間社会の安定的身分秩序を混乱させる異端邪説の危険思想である。従って中和の中庸・礼の必要な理由は、現実の人間社会の安定秩序の維持策なのである。『荀子』には、「先王は其の乱を悪む。故に礼儀を制めて上下を分かち」（礼論）とあり、「礼は未だ然る前に禁じ、刑は然る後に制するものなり」（王元亮『唐律釈論』序）とある。礼

は社会秩序の混乱を未然に防止する対策である。孟子は、「礼儀なければ、すなわち上下乱れる」（下３９６）とも言う。

孟子は、「博愛主義は社会の混乱状況を解決する」（上７０）、「舜の大孝で世の親子間の道徳が確立した」（下５８）と言う。極端の長所は状況規定的で一時的なのである。孟子は「彼も一時、此も一時なり」（上１８２）と言う。博愛主義は社会の混乱状況の解決に役立つが、家族秩序の混乱解決には役立たない。逆も同じである。従って全ての混乱状況の解決には、自分の立場を臨機応変に豹変させて両極端の長所を生かす中庸が必要になる。有権の中庸は、特定状況を救済する己然の解決策であり、一時的な便法である。孟子は、「禹や顔回の行動が違うのは状況が違うからであり、お互いを取り替えれば同じ事をしたに違いない」（下１０４）と言う。両者の置かれている状況が違うから行動が違うのである。

６　中庸思想の目的

中和の中庸＝礼の目的は、人間社会の安定維持のために協調性や和合の大切さを述べたものである。『論語』に「礼の用は和をもって貴となす」（２３）とある。『荀子』は「礼の作用は和である」（礼論）と言う。礼による和合の大切さを主張するのは、この世には極端な人や物は存在しない。善悪や清濁や賢愚の区別は曖昧、治乱もそれ程の差がないという、人間や社会への普通認識が前提にある。対立矛盾する心は同時に持っている、人間は矛盾に満ちた動物という認識がある。だとすればどちらも大事だから、どちらにも偏らずに、両者を調和和合さしていくことが、大切なのだとの考えが生まれてくる。家族と国家の同時両立は、人倫存続の絶対的命題である。孟子は「人間をやめてミミズにならなければ潔白を貫けない」（上２６３）、人の世は曖昧で家族も国家は分離不可能で大切と言う。

和合が大切なのは、安定した世での自分の身の安全性、国家の安定、天下統一のためである。孟子は、「出る杭は打たれる」（下４２０）と警告し、「人の和合つまり人間の団結力は、地の利や時の利に勝る」（上１５１）と言う。従って多様な人間を和合させる努力の目的は、天下統一という王道政治の完成である。

常に変化する世の中で自己や社会の安定のために特定状況に的中した特定行動をすることが、中権の中庸の目的である。孔子に学びたいと言う孟子は、「伯夷・伊尹・柳下恵・孔子はみな聖人であるが、孔子こそは時の宜しきに従い行動した時中の聖人である」（下１７４）と言う。ある時は伯夷となり、ある時は伊尹となり、ある時は柳下恵となる、その時々の状況に的中した人物を演出できる豹変が上手な多重人格者こそ、孔子だからである。

時中の大切さを主張するのは、善悪・清濁や治乱の差異は明白である、どれも大切であるが、状況規定的で一時的長所、状況が変われば役立たないとの人間や社会への過剰認識がある。ここから効率主義が生まれてくる。時中の目的を孟子は、「『時勢には勝てぬし、いくら鋤・鍬があっても時期が来な

ければ役には立たぬ』というのがあるが、・・・されば、骨折りは〔王業をなしとげた〕古人の半分でも、その功績は必ず古人に倍するであろう。ただ、今こそまさにその時なのだ」（下１１４）と言う。時中の中庸の目的は、最小の努力で最大の成果を期待する効率主義による王道政治の実現なのである。

〔注〕本文中の（下１１４）は引用頁を示す。各々、『論語』（金谷治訳注　岩波文庫）、『孟子』（小林勝人訳注　岩波文庫）、『中庸』（金谷治訳注　岩波文庫）に拠る。